

ICA ブリスベン大会及び AICCM における 修復ワークショップ

国立公文書館業務課修復係長

中島 郁子 なかじま・いくこ

ICA ブリスベン大会での修復ワークショップを、前回クアラルンプール大会に続いて行った。

今回はICA大会でのワークショップの他に、オーストラリア文化財修復協会（AICCM：Australian Institute for the Conservation of Cultural Materials Inc.）からの依頼を受け、ブリスベンでの滞在を延ばして、AICCMのメンバーに対するワークショップも行った。

ICAのワークショップの会場は、本大会会場のコンベンション・エキシビション・センターのある市の中心部から車で30分ほどのところに位置する、クイーンズランド州立公文書館。ワークショップ前日の午後州立公文書館を訪れ、机の配置や日本から送った人数分の器材のセットなどの準備を、州立公文書館で修復を担当しているアリソンさんの協力の下準備を済ませる。

ワークショップは8月24日（金）、午前と午後9：30～12：00、13：30～16：00の2回行い、当館の修復係3人が担当した。30分間の増田勝彦昭和女子大学教授の講演「日本における修復技術の変遷」から始まり、その後実技に入った。

まず日本の伝統的な修復について、和紙、刷毛などの道具や糊などについての説明をひと通りし、虫損のある資料を参加者に渡して「繕い」から始めた。

予定では「繕い」の後「裏打ち」、霧吹き使用の極薄和紙による「両面打ち」、「四つ目綴じ」と続けて行うつもりでいたが「繕い」後に休憩が入り、最後の当館が被災公文書等修復支援事業として行っている「津波被害資料の洗浄から乾燥」（東京文書救援隊考案システム）の実演が終わったのは12時を回っていた。



クイーンズランド州立公文書館 (ICA)



「繕い」の作業中 (ICA)

最初はおとなしかった会場も、動きの小さい「繕い」から、休憩を挟んで動きの大きい「裏打ち」を始めるころには参加者に活気が出始め、熱気のある会場に変わっていった。午後の2回目は、増田先生の配慮と1回目より人数が少なかったため、休憩時間をとってもほぼ時間通りに終えることができた。

参加人数は全部で25人。事前登録では30人を超えていたのだが、人数が当日になって減ってしまったのは、大会自体が前日に閉会したこと、ワークショップの会場が大会会場とは別で、車で30分ほどの移動距離があったことなどが原因ではないかと推測している。しかし、人数に関係なくほと

んどの参加者が、和紙と生麩糊による初めての修復体験を、最初は少々緊張気味でぎこちなく、そのうち表情を緩ませて、実技最後の和装本四つ目綴じでは四苦八苦しながらも、完成品と提供品の刷毛などの器材を手に、締めくくりは笑顔だった。

参加者についてはオーストラリアがほとんどだったが、他には香港、チュニジア、パプアニューギニアが参加していた。終了後、チュニジアの参加者から、「このような資料の修復をしたいが、自国の環境下ではできる状況にない。可能にするためには何をしたらいいか」という意味の質問があった。資料の修復に関してではなく、それ以前の問題から対処していかなければならない状況は、修復研修で何度か訪れているインドネシアの現状と重なり、質問者が望む環境に往きつくまでの時間を考えると道のりは長そうだが、いつかの体験が役立つのならうれしい。

AICCMのワークショップは8月27日(月)9:00~16:30、クイーンズランド州立図書館で行った。州立図書館はICA大会会場のコンベンション・エキシビション・センター、美術館や博物館、劇場など文化施設が集中している地域にあり、ブリスベン滞在中宿泊したホテルから近かったこともあり、前日の事前準備でも当日の移動でも時間



記念写真 (ICA)

に気を遣わずに済んだ。参加人数は、定員20名の募集に35名の応募があったそうで、最終的には1名追加の21名となった。

AICCMはオーストラリアの代表的な修復専門家団体で、オーストラリア国内外の修復専門家、修復を学ぶ学生、文化財に携わるアーキビストや学芸員、図書館職員など幅広い分野の会員で構成されている。

今回の依頼は、ICA大会後の8月29日から31日までAICCM図書、紙、写真資料シンポジウムがクイーンズランド州立図書館で開催されることから、それに先立って参加者向けにワークショップを開いてほしいというものだった。

このワークショップを準備段階から担当した州立図書館のガジェンドラ・ラワットさんは、修復家としてまだ若いころ日本の修復家からトレーニングを受けたそうで、AICCMのメンバーに日本の技術を実際に見せたいという強い思いを感じた。会場に提供してくれたガジェンドラさんの職場の



準備整った AICCM の会場



揃いの前掛けを締めて (AICCM)

修復室には刷毛はもちろんのこと、木製の糊盆(実はすし桶らしい)、馬毛と絹張りならぬ化繊を張った2種類の糊漉し器、仮張り板もあった。

ワークショップの内容はICAと同じでいいとのことだったが、こちらは増田先生の講演なしの実質6時間と長いので、内容を増やし一つ一つに時間をかけて丁寧な実習を心掛けた。

簡単な自己紹介からワークショップは始まったが、後で送ってもらったリストによるとオーストラリア各州からの他にニュージーランドから一人の参加があった。参加者の所属は美術館、図書館の職員が半数近くを占め、文化財関連機関からと、公文書館ではクイーンズランド州立公文書館とタスマニア公文書館から、そして学生が3人。この分野では珍しくない光景だが、男性が一人と傍から見て少し肩身が狭そうだった。

通訳を担当してくれたのは、キャンベラの国立映像音響史料館で修復に携わっている石川真吾さん。石川さんもワークショップ後のAICCMの研修に出席することになっていた。参加者の何人かとも顔見知りのようだ。ワークショップの円滑な進行は、ガジェンドラさんの協力と、海外生活が長くて時折こちらの日本語に戸惑いながらも通訳を務めてくれた石川さんのお陰だ。

自己紹介後の器材などの説明はICAと同じ、糊については実際に作る場所から始め「繕い」へと続いたところで飲み物とお菓子付きの休憩。休憩後に「裏打ち」。ICAの参加者と違いこちらは日々修復をしている人たちが相手のため、初心



図を見ながら四つ目綴じ (AICCM)

者のために考えた不織布使用の「裏打ち」と不織布なしの「裏打ち」を行った。2回の「裏打ち」を続けて行うつもりでいたが1回目の「裏打ち」で昼の休憩。図書館の中庭で、サンドイッチと飲み物と果物の昼食を参加者といっしょにとった。食後ガジェンドラさんが建物の壁に付いていた跡を示した。ブリスベンでは去年の1月に洪水があり、図書館のすぐそばを流れているブリスベン川が氾濫して1階まで水に浸かってしまったそうだ。

午後は2回目の「裏打ち」後、霧吹き使用の「両面打ち」。3時の休憩後は、AICCMのために追加で入れた増田先生考案の「微小点接着法」を行った。人数分の道具を手作りで用意し持って行ったところ、従来の「裏打ち」とは違う方法に非常に高い関心を示していた。この他にもいくつか追加を考えていたのだが、ICAの内容に「裏打ち」を1回増やし「微小点接着法」の追加とで時間がいっぱいになってしまった。

ICAのワークショップには、人数が少なかつたせいもあって物足りなさを感じた面もあったが、終了後の参加者の笑顔はそんな思いを吹き飛ばすほどのものだった。AICCMでは文化財修復家相手というところに過剰に反応し、内容が基本的すぎないか気になっていた。しかしワークショップ後のAICCMの研修を終えた石川さん



昼食後しばし談笑 (AICCM)

は、研修中にワークショップ参加者と話したがみんなに好評だったこと、参加者が参加していないメンバーにワークショップの内容を説明している場面を何度か目にしたこと、すでに習得している技術でも新たに学べたこと、学生の参加者は初めての修復体験の機会を得て喜んでしたことなどを伝えてくれた。

ICAでもAICCMでも関係担当者とワークショップ以外で意見交換のできる時間はほとんどなかったが、オーストラリアの修復家たちも、日本の技術に限らず、和紙をはじめとする修復器材に並々ならぬ関心を抱いていることを、ワークショップを通じて知ることができた。このブリスベンでの経験、出会いを大事にしていきたい。



記念写真 (AICCM)